

中国語母語話者による日本語名詞修飾節中の テンス・アスペクト表現の習得研究

— ル形とタ形を中心に —

盛 文淵¹⁾*, 吉本 啓²⁾

1) 東北大学大学院国際文化研究科, 2) 東北大学高等教育開発推進センター

1. はじめに

(時制性を持たない)

動詞を中心に構成された名詞修飾節において、その動詞の形はル形とタ形のいずれかをとる。ルとタはテンス・アスペクトの表現形式として、単文（または主文）では基本的に非過去（現在・未来）と過去のテンス的意味を表しているが、名詞修飾節では未完了と完了というアスペクトの素性がしばしば前面化する。例えば、

- (1) a. 友達が日本に来る/来た。(非過去/過去)
b. 日本に来る/来た友達と出会った。(未完了/完了)

しかし、名詞修飾節のル形とタ形は必ずしも未完了と完了のアスペクト的意味を表すとは限らない。(2)にあげた例文のように、テンスの素性（つまり非過去と過去の意味）が前面に出ている場合もあり、時制と関係なく被修飾名詞の属性や性質などを表す形容詞的な使い方もある。また、単文のテイルから転換したものもある。

- (2) a. 明日から展示する絵はここに運びました。
(非過去)
b. 京都でとった写真をお送ります。(過去)
c. 肉を食べる動物は牙が発達しています。
(時制性を持たない)
d. この町には曲がった道が多いです。

- e. 会場には野球帽をかぶった人がたくさんいます。
(結果状態)

以上から分かるように、名詞修飾節における述語のルとタの意味は複雑で多様である。寺村(1984:194)も「連体修飾節をする動詞や形容詞におけるテンス、アスペクトの現われかたは、最も複雑で、きまりも微妙である。」と述べ、その複雑さを指摘している。従って、日本語学習者にとって名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現は難しい文法項目のひとつであると考えられる。

第二言語としての時間表現の習得研究はテイルを中心に多く行われてきた(Shirai & Kurono 1998; 許 2006など)が、名詞修飾節中のル形とタ形の習得研究はまだ非常に少ない。一方、日本語の名詞修飾節に関する習得研究はNoun Phrase Accessibility Hierarchy (NPAH) と Perceptual Difficulty Hypothesis (PDH) の観点からの研究が主流であり、テンスとアスペクトの観点から名詞修飾節の習得状況を考察したものは大関(2004;2008)、許(2006b)など少数にとどまっている。また、述語のル形とタ形という形態上の対立を考慮して行った習得研究は筆者がOPI発話資料を考察したもの(盛 2009)以外はほとんどない。中間言語の全体像や習得過程を捉えることは、単一の調査だけでは困難である(迫田 1998:41)。名詞修飾節中のル形とタ形の習得過程の研究も複数の調査が必要で

*) 連絡先: 〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41 東北大学大学院国際文化研究科 seibunen@msn.com

あろう。そこで、本研究は盛（2009）が行った発話資料の調査に引き続き、日本語の自然さ評定タスクを用いて研究を進めていく。本研究の目的は以下の2点である。

- (3) a. 名詞修飾節中のル形とタ形の各意味用法の習得難易度を明らかにする。
- b. 盛（2009）が行った発話資料に得られた名詞修飾節中のル形とタ形の習得順序と一致するかどうかを検証する。

2. 先行研究

2.1 名詞修飾節中のル形とタ形

前節に示したように、名詞修飾節中のル形とタ形は基本的にアスペクトの意味の他に、テンスの意味を表す場合とテンス・アスペクト素性のどちらも持たない場合がある。中畠（1995）は、テンス性とアスペクト性の有無により、名詞修飾節中のル形とタ形の果たす役割を次のように6つに分類した。

表1. 名詞修飾節中のル形とタ形
(中畠1995: 24, 表題は筆者による)

	ル形による連体修飾	タ形による連体修飾
そのまま述定への転換が可能	テンス性（現在・未来）あり A	テンス性（過去）あり B
述定に転換した時テイルになる	アスペクト性（継続相）あり C	アスペクト性（結果相）あり D
純粋な装定。被修飾語の属性を表す	テンス性・アスペクト性なし E	テンス性・アスペクト性なし F

表のA欄とB欄は、動詞のル形とタ形がテンス性の非過去と過去を表すので、述定文に書き換えると、そのまま述定に転換することが可能である。C欄とD欄は継続相と結果相のアスペクト性を持つル形とタ形であり、述定に転換した時、テイルになる。また、E欄とF欄のル形とタ形はテンス性もアスペクト性も持たず、形容詞のように働いて被修飾名詞の属性を表す。

2.2 名詞修飾節に関する習得研究

名詞修飾節中のル形とタ形の習得研究はあまりない。OPI発話資料を考察したもの（盛 2009）以外はほとんどないが、名詞修飾節の習得研究としてテンス

とアスペクトの観点から研究を行ったものとしては大関（2004; 2008）と許（2006b）がある。

大関（2004; 2008）では、名詞修飾節の状態性の度合いによって表2のように連続的な分類枠組みをつくり、日本語学習者の発話を分析している。表の左のものほど状態・属性を表し意味的に形容詞に近いと考え、右へいくほど特定時点の出来事や状態を表す修飾節になると考える。その結果、研究の仮説である「形容詞に近い名詞修飾節から先に使用される」という習得プロセスは、自然習得者および自然習得中心の学習者においては観察されたが、教室学習中心の学習者については見られなかった。大関（2008）は教室学習者が出来事性の高い修飾節も早い時期から使っているのは教室学習の影響に起因していると説明しているが、検討する必要があるであろう。

表2. 修飾節の状態性に関する分類の枠組み
(大関2008: 110)

1) 属性・状態		2) 習慣	3) 進行	4) 過去または未来の出来事・状態	
(i) 形容詞節	(ii) 形容詞的な「タ」結果状態 動詞・恒常的習慣			(iii) 属性的	(iv) 出来事的
髪が長い人	着物を着た人／似ている人／役に立つ言葉	日本で働いている人	歩いている人	昨日買ったお菓子／友達にもらった本	昨日見た映画／明日行くところ

+属性・状态的 ←————→ -属性・状态的

許（2006b）は大関（2004）の分類枠組みを用い、台湾人日本語学習者（教室学習者）の作文を分析している。形容詞に近い「属性・状態」を表す修飾節が最も多く使われ、次に「過去・未来」「習慣」「進行」の順に使用されるという結果が得られた。状態性の最も低い「過去・未来」が二番目に多く使われたことから、大関が提起した「形容詞修飾と名詞修飾節の習得の間に連続性がある」という仮説は証明できなかった。

大関（2004）らの研究は形容詞修飾と名詞修飾節の間の連続性を論証するため、名詞修飾節の意味分類だけに着目し、動詞のル形とタ形という形態上の対立を

考慮していないので、考察は十分とは言えない。例えば、表2にある(i)形容詞節(ii)形容詞的な「タ」、結果状態、状態動詞・恒常的習慣を一つの「属性・状態」のカテゴリーに分類したのは不適切である。日本語学習者としての筆者の経験からは、(ii)の意味用法は決して(i)と同じように簡単に習得することはできない。この点については、盛(2009)によって証明された。また、後で述べるように本稿の結果とも合致する。

2.3 本研究における枠組み

盛(2009)では、テンスとアスペクトの観点から名詞修飾節中のルとタの意味用法を表3のように分類した。この分類では、ルとタの意味用法はさらに「非時制」、「時制」、「相」の三類に分けられる。本稿でもこの分類枠組みに従い、調査を行う。

表3. 「ル」と「タ」の意味分類(盛2009:63)

ル	1) 属性・概念・関係などを表す純粋な装定(非時制) ✓ 口臭を消す薬を買ってみます。
	2) 状態・能力(現在時制) ✓ 日本語ができる人がいたので、助かりました。
	3) 将来の出来事(未来時制) ✓ 明日から展示する絵はここに運びました。
	4) 習慣・繰り返し(反復・習慣相) ✓ いつも行く図書館で会いましょう。
	5) 未完了の出来事(未完了相) ✓ 店の前で、チケットを買う人が並んでいました。
	6) 感覚・知覚の内容(完結相) ✓ 魚を焼くにおいが嫌いです。
タ	1) 形容詞的用法(非時制) ✓ 成績の優れた学生を推薦します。
	2) 過去の状態・能力(過去時制) ✓ そばにいた人に道を尋ねました。
	3) 過去の出来事(過去時制) ✓ 京都でとった写真をお送りします。
	4) 過去の習慣・繰り返し(過去時制・反復・習慣相) ✓ 学生時代よく行った図書館は閉館するそうです。
	5) 結果の状態(結果相) ✓ 部屋の中で血のついたナイフを発見しました。
	6) 完了(完了相) ✓ バイトで稼いだ金を使って車を買いました。

盛(2009)でOPI発話資料¹⁾KYコーパス²⁾を考察した結果は以下のとおりである。学習者は非時制的なル形を一番早く習得し、時制的なル形は学習が進むにつれて徐々に使えるようになり、さらにアスペクトを

表すル形を習得する。タ形は時制的な「過去の出来事」から「完了、結果状態、形容詞的」の順に習得していく。ただ、「過去の状態・能力」と「過去の習慣・繰返し」の正用は一例もなかった。

テンスとアスペクト素性の観点からまとめると、ル形は「非時制 → 時制 → 相」の順、タ形は「時制 → 相 → 非時制」の順で習得していくことがわかった。

3. 研究方法

3.1 被験者

本調査の対象は(4)の通りである。

- (4) a. 中国の大学に在籍する日本語科2年生:日本語能力試験2級合格者。日本滞在経験なし。50人。
 b. 中国の大学に在籍する日本語科3年生:日本語の能力試験1級合格者。日本滞在経験なし。44人。
 c. 中国の大学日本語科卒業生:日本語能力試験1級合格者。日本滞在期間1年以上。30人

被験者はすべて中国の大学の日本語科に在籍するまたは卒業した中国語母語話者であり、日本語を学習したのは大学に入ってからである。

また、調査文は日本語として自然な文と不自然な文からなり、その適切さを確認するため、日本語母語話者(日本の大学に在籍の大学生)100人に協力してもらった。

3.2 タスク

調査では、日本語の文の自然さ評定テストを用いた。質問紙は砂川(1986)、中島(1995)、加藤(2003)などの先行研究を参考に、表3の分類に従って作成した。ルとタの意味分類の1項目につき4文ずつ、合わせて12項目48文から構成されている。主文の時制性が調査の結果に影響されないように、1項目の4文のうち、2文の主文が非過去時制であり、2文の主文が過去時制である。

質問紙の項目順序はランダムに配列した。名詞修飾節中のル形とタ形がどれぐらい自然であるかを5段階

で評定してもらった。また、「1とても不自然、2やや不自然、3どちらとも言えない」と被験者が判断した場合、自然な文に書き直してもらった。問題例を以下に示す。

(5) 問題例：

成績の優れる学生を推薦します。

1. とても不自然
2. やや不自然
3. どちらとも言えない
4. やや自然
5. とても自然

なお、自然と不自然の評定結果が偏らないように、調査文の半分の24文を自然な日本語の文、残りの半分以上を不自然な日本語の文とした。つまり、半分について3点以上の値を期待し、残りの半分について3点以下の値を期待している。例えば、(5)の問題例における名詞修飾節「優れる学生」は不自然文として用意したので、3点以下の値を期待している。

調査文の自然さの程度を筆者一人で判断するのは主観的になってしまうおそれがあると考え、質問紙の原案を作成した後、20人の日本語母語話者（大学生）を対象にプリテストを行った。その結果を参照し、5人の日本語母語話者（大学院生）と討論しながら調査文を修正した。さらに、実験を実施する際、日本語母語話者（大学生）100人に協力してもらい、調査文の妥当性を検証した。

回答時間の制限は設けなかったが、学習者は基本的に30分以内、日本語母語話者は15分以内に終わったので、調査は被験者に重い負担をかけていないと考えられる。

3.3 分析方法

まず日本人群による各調査文の評定平均値及び平均値±SD(標準偏差)を算出する。SD(標準偏差)はデータの分布の広がり幅(ばらつき)をみる一つの尺度である。平均値と標準偏差の値が分かれば、データがどの範囲にどのような割合で散らばっているか(分布)がある程度明らかになる。正規分布においては、平均値±1SDの範囲に全データの68.27%が分布するという関係が成り立っている。(「統計学用語辞典」

2010/2/21アクセス、による)

今回の調査では、平均値±SDの範囲内は68.72%の日本語母語話者に許容される自然さの評定値と考えられるので、平均値±SDを算出して調査文の適切さを確認する。

次に学習者の各グループと全体の正答率を計算する。Repeated-measures ANOVAを用いて、全学習者の正答率を分析し、ルとタの意味項目間の有意差を検定する。その結果をグループごとの正答率と結びつけ、ルとタの習得順序を考察する。

4. 結果

4.1 母語話者の評定結果

母語話者の評定平均値を集計した結果、基本的に筆者が期待する値と一致した。つまり、自然な文として用意した文の評定結果の平均値±SD(標準偏差)が3点以上、不自然な文として用意した文の評定結果の平均値±SD(標準偏差)が3点以下の範囲内におさまった。

例えば、「肉を食べる動物は牙が発達しています。」という調査文の平均値は4.86、SDは0.43であるので、平均値±SDは4.43-5.29となる。つまり、68.72%の母語話者が4.43以上の自然さを認めているわけである。文の自然さが母語話者によって許容されたと考えてもいいであろう。

ただし、母語話者の評定結果のうち、以下の3文は筆者の期待した値とややずれていた。

- (6) a. 日本語を話せた人がいたので、助かりました。
- b. 誰かが階段を下りた音がした。
- c. 単位を取った学生はレポートを出してください。出さなかったら、単位をあげられないです。

(6)にあげられた調査文の平均値±SDはそれぞれ0.92-3.02, 0.84-3.24, 0.62-3.04である。筆者が不自然な文として用意した文は、得点3を超えているので、ややずれがあると考えられる。ただ、評定値はまだ不自然の得点に偏っているので、集計の結果に入れることにした。この3文に対して、「3どちらとも言えない」と答えても正解とする。なお、この3文以外

の45文に関しては、自然な文として用意した文の判定が4と5である場合、不自然な文として用意した文の判定が1と2である場合のみを正解とする。

4.2 学習者の評価結果

学習者の正答率の結果を表4に示す。表の上から下へ、ルとタそれぞれの意味項目を全体の正答率の高い順に並べた。便宜上、各意味項目に1-12の数字をつけておいた。

表4. 学習者の正答率

	グループ	2年生	3年生	卒業生	全学習者
ル	1 純粋	93%	91%	97%	93%
	2 将来	88%	95%	90%	91%
	3 状態・能力	89%	86%	94%	89%
	4 未完了	81%	70%	91%	79%
	5 繰り返し	68%	68%	83%	72%
	6 感覚	62%	74%	77%	70%
タ	7 過去	87%	89%	98%	91%
	8 完了	79%	84%	83%	81%
	9 過去の繰り返し	84%	77%	78%	80%
	10過去の状態	69%	64%	83%	71%
	11結果状態	64%	59%	65%	62%
	12形容詞的	56%	50%	66%	56%

ルに関して、「1 純粋」、「2 将来」、「3 状態・能力」の正答率が高くて、学習者全体の平均値は90%近くまたはそれ以上である。日本語能力が比較的低いと思われる2年生もこれらの意味項目において高い正答率を記録した。しかし、残りの3項目「4 未完了」、「5 繰り返し」、「6 感覚」は全学習者の平均正答率が80%以下に下がっている。そのうち、正答率の一番低い「6 感覚」において、卒業生の正答率も80%を下回り77%であった。全学習者の正答率はわずか70%であり、一番高い正答率の「1 純粋」と23ポイントの差があった。

一方、タに関して、「7 過去」はいずれのグループも高い正答率が得られ、全学習者の平均値は91%に達している。正答率が次に高いのは「8 完了」と「9 過去の繰り返し」であり、いずれも80%程度の正答率であった。正答率がさらに下がっていたのは「10過去の状態」であり、全学習者の平均値が71%になった。正答率の

一番低い「11結果状態」と「12形容詞的」に関しては、日本滞在期間一年間以上の日本語科卒業生でも60%台に止まった。

4.3 各意味項目間の有意差検定

ルとタの各意味項目の間に習得の難易度を検討するため、本稿はRepeated-measures ANOVAを用いて有意差検定を行った。結果は表5と表6の通りである。表にある1-12の数字は表4の数字を指す。二つの意味項目の間に有意差が見られるのは習得の難易度が離れていると考えられる。

表5. ルの意味項目間の有意差

ル	1	2	3	4	5	6
1				*	*	*
2				*	*	*
3				*	*	*
4	*	*	*			*
5	*	*	*			
6	*	*	*	*		

注: * p<0.05.

表6. タの意味項目間の有意差

タ	7	8	9	10	11	12
7		*	*	*	*	*
8	*			*	*	*
9	*			*	*	*
10	*	*	*			*
11	*	*	*			
12	*	*	*	*		

注: * p<0.05.

表5に示すように、「1 純粋」、「2 将来」、「3 状態・能力」の間では有意差が見られなかったが、これらと「4 未完了」、「5 繰り返し」、「6 感覚」の間にはそれぞれ有意差が見られた。「4 未完了」は「5 繰り返し」との差がなかったが、「6 感覚」とでは差があった。つまり、「1 純粋」、「2 将来」、「3 状態・能力」の習得は有意に「4 未完了」、「5 繰り返し」、「6 感覚」より容易であり、「4 未完了」の習得は有意に「6 感覚」より容易であると考えられる。

表6にタの意味項目間の有意差を示す。「8 完了」と「9 過去の繰り返し」の間、「9 過去の繰り返し」と「10過去の状態」の間、そして、「11結果状態」と「12形

容詞的」の間には有意差が見られなかったが、そのほかの項目間にいずれも有意差が検定された。特に、「7過去」は他の五つの意味項目との間に有意差が見られた。つまり、「7過去」は学習者にとって最も容易な意味項目であると言える。また、「8完了」と「9過去の繰返し」の習得は有意に「10過去の状態」、「11結果状態」、「12形容詞的」より容易であり、「10過去の状態」の習得は有意に「12形容詞的」より容易であると考えられる。

以上の結果をテンスとアスペクト素性の観点からまとめると、学習者の習得難易度は次のとおりである。

(7) ル：非時制，現在・将来時制 <未完了相 < 完結相

タ：過去時制 < 過去時制・状態，完了相 < 結果状態相，過去時制・反復相 < 非時制

この習得難易度は盛（2009）がOPI発話資料を分析した結果と基本的に一致している。ただ、発話資料では観察されなかった過去時制・状態，過去時制・反復相を表す「過去の状態」と「過去の繰返し」は、本稿の自然さ評定タスクでは一番難しい習得項目ではなかった。

5. 考察

5.1 非時制性のル

ル形は動詞の基本形で、学習者が動詞の形を変更せずに使用できるので、習得されやすいのだろう。また、学習者の母語である中国語は時制のない言語であり、名詞修飾節は基本的に「動詞基本形+的（修飾節の標識）」というフレームで構成する。例えば、「先生の働く意欲」を中国語に訳すると、「老师的工作热情(lǎoshī de gōngzuò rèqíng)」となる。両言語とも動詞基本形（働く-工作）であるので、簡単に習得されるのも不思議ではない。

5.2 時制性のルとタ

時制性のルは現在の状態または将来の出来事を表し、述定の意味用法と同じであるので、学習者にとって単文の使い方をそのまま名詞修飾節に適用できる。

時制性のタも同じく、述定に転換しても過去の意味となるので、学習者にとって容易である。また、タは時制の性質がより強く感じられるので、時制の意味が比較的早い時期に習得されると考えられる。この点について、発話資料でも証明された。盛（2009）の調査では、過去時制のタは早くも中級下の学習者より産出された。以下はその例文である。

- (8) a. あれ本，〈9時から〉学校に一，学校に一，
もらいましたの本，ちょっと見て。（中級下）
b. 夜ご飯はあれ一，〈うん〉うーん，，スーパー
に買いましたのあれ一，生のおさかな。（中
級下）（盛2009：65による）

例文にある名詞修飾節「もらった本」、「買ったあれ」の中国語訳は「领到的书(lǐng dào de shū)」,「买来的那个(mǎi lái de nèi ge)」という時制表記のないものであるが、学習者は母語に影響されず早く産出した。大関（2008）と許（2006b）の研究でも、教室学習者にとって「過去・未来」を表す修飾節が習得されやすい可能性があるとは指摘されている。学習者が文法学習を経て、早い時期から「過去」の「タ」を習得できると考えられる。

5.3 アスペクトのルとタ：テイル・テイタとの競合

本研究の結果からアスペクトを表すルとタの習得が学習者にとって比較的困難であることが分かった。周知のように、「テイル」は専ら日本語のアスペクト表記として使われている。それに対して、ルとタの顕在的な性質は時制性である。また、名詞修飾節中でアスペクトの意味を表すルとタが述定に転換した時、テイルになる場合が多い。学習者が時制性のルとタのように単文のルールを当てはめれば、間違いが出てくる。

もっと厄介なのは、ル/タとテイル/テイタの二通りの形態が使用可能な場合である。このような複雑な競合関係は学習者を混乱させると考えられる。

学習者が実際に書きかえた文を見ると、ル/タ形をテイル/テイタ形にした答えが多かった。例えば、次の(9a)にあげられた調査文に関して、55人(44.3%)の学習者が「働いている」または「働いていた」に書

き直した。また、(9b)に関しては、43人(34.7%)の学習者が「かぶっている」に書き直した。

- (9) a. この絵は父が働く姿を描いたものです。
b. 会場には野球帽をかぶった人がたくさんいます。

5.4 「過去の状態」と「過去の繰返し」のタ：ルとの競合

状態と繰返しを表すのは基本的にルであるが、過去の状態や繰返しは何らかの変化が起こって、現在はもう過去の状態や繰返しが続いていないという意味を表す場合、ルよりタのほうが適切である。例えば、

- (10) ここにあった古い家は、去年取り壊されました。

(10) では、古い家は去年取り壊されたので、現在はもはやないわけである。タのほうが適切であろう。しかし、「ここにある古い家は、去年取り壊されました。」というようにル形で構成した調査文において、基本形のル形から過去形のタに書き直した学習者は非常に少ない。

5.5 非時制性のタ：ル・テイルとの競合

すべての意味項目の中で、非時制性のタの正答率が最も低い。その理由を考えると、おそらくタの性質と関わっている。タは過去形として単文や主文によく使われている。その強い時制性が、非時制性のタの習得に負の影響を与えていると考えられる。学習者が非時制性のタのかわりに非時制性のルを使うことは予測できる。

またもう一つ考えられるのは、非時制性のタが述定に転換した時、テイルになる場合が多い。例としては以下の文が挙げられる。

- (11)a. 大きく開いた窓から涼しい風が入ってくる。
b. 火がついた煙草をくわえて歩かないでください。(中島1995:26による)

これらの例文における名詞修飾節を述定に転換する

と「窓が大きく開いている」「煙草に火がついている」と、テイルになる。

(12) は実際の調査文である。ここでは、「曲がった道」は過去でもなく、現在でもなく、時制性と関係ないことが常識によって判断できる。また、述定に転換すると、「曲がっている」になる。タ形を使うこの文に対して不自然と判定した学習者がとても多かった。65人(52.4%)の学習者が「曲がる」または「曲がっている」に書き直した。

- (12) この町には曲がった道が多いです。

6. 結論

本稿では、日本語の自然さ評定タスクを用いて中国語母語話者による日本語名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現の習得状況を考察した。調査結果は、盛(2009)がOPI発話資料を分析した結果と基本的に一致している。テンスとアスペクト素性の観点からまとめると、学習者の習得難易度は次のようになる。

- (13) = (7)

ル：非時制、現在・将来時制 < 未完了相 < 完結相

タ：過去時制 < 過去時制・状態、完了相 < 結果状態相、過去時制・反復相 < 非時制

アスペクトのルとタ、「過去の状態」と「過去の繰返し」のタ、非時制性のタが学習者にとって困難であるのは、競合するテンス・アスペクト表現があるからであると考えられる。

注

- 1) OPI (Oral Proficiency Interview) とは外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテストである。
- 2) 「KY コーパス」とは平成8-10年度文部省科学研究費補助金・基盤研究『第二原語としての日本語の習得に関する総合研究』(研究代表者カッケンブッシュ寛子)において鎌田修と山口博之が中心となって行っ

たOPIの文字化資料をさす。

参考文献

- 大関浩美 (2004) 「日本語学習者の連体修飾節構造習得過程 - 修飾節の状態性の観点から - 」『日本語教育』121, 36-45.
- 大関浩美 (2008) 『第一・第二言語における日本語名詞修飾節の習得過程』くろしお出版.
- 加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房.
- 金水敏 (1994) 「連体修飾の『～タ』について」田窪行則 (編) 『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版.
- 許夏珮 (2006a) 『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版.
- 許夏珮 (2006b) 「台湾人日本語学習者による連体修飾構造の習得」『台湾日本語文学報』21, 369-392.
- 黒野敦子 (1995) 「初級日本語学習者における『-テイル』の習得について」『日本語教育』87, 153-164.
- 砂川有里子 (1986) 寺村秀夫 (企画・編集) 『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ2: する・した・している』くろしお出版.
- 盛文淵 (2009) 「中国語母語話者による日本語名詞修飾節中のテンス・アスペクト表現の習得過程 - OPI発話資料を基に - 」『社会言語科学会大会発表論文集』24, 62-65.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味2』くろしお出版.
- 統計学用語辞典 URL: <http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/>
2010/2/21アクセス.
- 中島孝幸 (1995) 「連体修飾と動詞の形」『三重大学日本語学文学』12, 23-32.
- 迫田久美子 (1998) 『中間言語研究』溪水社 (広島)
- 野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子 (2001) 『日本語学習者の文法習得』大修館書店.
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版.
- Shirai, Y. & Kurono, A. (1998) The acquisition of tense-aspect marking in Japanese as a second language. *Language Learning*, 48, 245-279.